会 議 録

1 附属機関等の会議の名称　令和3年度第5回丹波篠山市図書館協議会

2 開催日時　令和4年1月21日(金) 13:30～15:00
（傍聴の受付時間　13:15～13:25）

3 開催場所　丹波篠山市立中央図書館 視聴覚ホール

4 会議に出席した者
(1)委　員　杉本克治、向井祥隆、中西文枝、溝畑あけみ、西野裕子、
長澤一正、
欠席 木村 研(敬称略)
(2)事 務 局　部長 小林康弘、館長 小畠理三、参事 中筋吉洋、
係長 徳田実穂、司書 小土井月瀬

5 傍聴の人数　0人

6 会議の公開、非公開の別　公開

7 審議の概要
1. 開会
2. あいさつ
3. 協議事項
(1) 第2次丹波篠山市立図書館ビジョン(案)について

【協議事項(1)事務局より説明】
※定例教育委員会(12/20)の意見、並びに図書館協議会委員への資料配布(1/10)後に委員から提出された意見をもとに修正内容を説明。

(委　員) 17 ページの市民センター図書コーナーについて、司書 2 人をカウンターに配置、蔵書計画も含めて総括する専属職員の配置が必要ではないか。現状は司書 1 名と職員 1 人がそれぞれ交代で運営にあたられているが、効率が悪いと思われる。専属職員を図書コーナーに常時配置することは難しいかもしれないが、図書館に配置してほしい。ビジョンの文言にある司書(2 人)体制を「目指す」という表記はあいまいではないか。

（事務局） 図書館としては司書 2 人体制を目指すべきであると考えているが、人事のことなので図書館だけで決められない。このため、表記については司書 2 人体制にするという、言い切った表現は難しい。職員については、常時、図書コーナーに配置することは難しいが、図書コーナー担当職員という位置づけで、図書館の事務分掌で担当を設けたいと考えている。

（委　員） 現状、職員はローテーションなので対応も様々で効率的なサービスにつながっていないのではないかと感じている。やはり、カウンターには司書 2 人を配置し、司書にしっかりと任す体制を構築されてはどうか。

（事務局） 4 月以降の司書を確保するため、現在 4 人の募集をかけている。知り合いがあれば委員の皆様からもお声掛けをお願いしたい。結論から言うと、必要人数の司書が確保できた段階ではご提案の体制も可能だと思うが、司書の数が足りない現状ではすぐには厳しい。図書館としては、司書 2 人体制を目指して取り組んでいきたいという意味で「目指す」という表記としている。ご理解いただきたい。

（委　員） 4 人の募集はすべて任期満了での募集か。それとも確実に 4 人足りなくなるという前提での募集なのか。

（事務局） 現状 4 人のうち 3 人は司書ではなく事務補助員である。事務補助の任期が今年 3 月末をもって満了となるため、新たに司書資格を有する方を優先的に募集することとしている。

（委　員） 募集しても司書の応募がなければ、事務補助員の募集もあり得るのか。

（事務局） あり得る。

（委　員） 短期の実践項目の一つなので、「目指します」と表記し、結果実現できなかったとしても、継続して取り組んでいくという考えでよいか。

（事務局） そのとおり。

（委　員） 仮定だが、事務補助員と司書をカウンターに配置することは可能か。

（事務局） 業務的には可能である。令和3年度は、職員が行けないときに事務補助員が代わって対応している。

（委　員） 図書コーナーの運営としては、できればその体制の方がよいのではないか。職員は図書館で業務をこなしてもらった方がよいと思う。

（委　員） 向こう 10 年、今の職員数でいけるという保証はない。むしろ職員数が減っていき、今の定数を維持することが難しくなっていく。ビジョンで「こうでなければならない」と表現することは難しいと思う。

（事務局） ビジョンは方針であり、大綱であり、方向性を示すものである。これに人事に関わる体制まで踏み込んでよいのかということもある。ビジョンには、人事的な拘束力は全くないと考えている。そこを追求できるように努力していくものであるので、時代の背景、予算、いろんな事情がある中で、修正を加えた

り変更したりしながら、方向性に向かって努力していく。職員、市民、ボランティアのバイブルとしてこのビジョンがあるととらえていただきたい。

（委　員） そういう意味からすると、削除されたマイナンバーカードの件は、向こう 10 年間で出てくる事項ではないか。

（事務局） ビジョンに掲げたのは、令和 4 年度に新規事業として取り組む見込みとなったので掲載していた。マイナンバーカードをいろんなところで使えるようにすることは国の施策であり、方向性は間違いない。ただ、状況が変わり、来年度に取り組むことがなくなったということで、館長判断でビジョンからは削除している。10 年のうちで継承すべき大事な事項であるということであれば、ビジョンにそのまま掲載しておいてもよいと思う。

（委　員） 今後、マイナンバーカードを活用することが具現化する状況であれば、ビジョンに入れておいてもよいのではないか。

（委　員）マイナンバーカードの普及促進は、社会的な要請、国の要請であり、このビジョンの外側の仕組みのことだと思う。私たちが目指すものではなく、国の動きの流れで取り組んでいくということであれば、ビジョンには掲載せず、運用の中で考えていけばよいと思う。

（委　員） 承知した。それでよい。

（委　員） 1ページの最後にある、丹波篠山の時代をリードする図書館づくりという表現に当てはまる方向性を私なりに考えた。最近では、若い人も表現にたけており、自分で動画を作って発信し、生活ができる時代になっている。表現の手腕として 10 年のビジョンの中で「本をつくる」時代を提言してはどうか。私が知っている限りでも、絵本や自叙伝をつくったり、会社の沿革史をつくったりしている人が結構いる。自分の暮らしを本にまとめるという視点を図書館のあり方の中で提言してはどうか。

なぜかというと、本を書いた人（作家）の居場所（顔）は本があるから図書館の中にある。市民がどんな顔で図書館に参加しているかといえば、ボランティアの方は参加できているかもしれないが、市民がつくった本を図書館のコーナーで集めれば、そこに市民の顔が増えてくるのではないか。図書館とのつながりができるのではないか。ビジョンに盛り込めば、図書館の新たな方向性が出てくるのではないかと思ったので皆さんに提案させていただく。

（委　員） 自叙伝や会社の沿革史などを積極的に図書館で収集するということか。

（委　員） 今の段階では収集するということになるが、これからは「自分の本をつくりませんか」という取り組みや、本をつくる講座も含めて進めてはどうか。

（事務局）図書館の現状をお話しすると、図書館ではすでにつくられた本を寄贈いただいたり、本を置かせていただいたりしている事例が結構ある。

（委　員） 図書館はあらゆる資料を保存しておかなければいけないという使命がある。その中に郷土資料があり、すでに寄贈されている方もある。それをより一層強く PR して、自費出版した資料を図書館にぜひ一冊くださいと投げかける、キャッチコピーとしては、「あなたも、あなたの本を図書館に並べませんか」というふうな形で呼びかけて、エッセイや小説の書き方の講座や、製本する講座などを図書館の事業として行えば面白い。

しかし、これからは全国の人口も減り、行政に関わるニーズも減っていく。ビジョンは方針であるので、実現可能な範囲を見極めておかないと難しい。

（委　員） 図書館の運営に関して、市民の味方を増やしていくことから考えると、自分がつくった本が図書館にあるんだという人が増えていけば、図書館として力強いことだと思う。

（委　員） そういう仕掛けづくりは大切だと思う。しかし、行政の予算はこれからどんどん減っていく。予算は職員数にも蔵書構成にもかかわってくる。気を付けるべきことは、図書館の職員が対応していかなければいけないということ。職員が異動で替わったりするとできなくなることもあることをビジョンに盛り込むことは難しいと思う。

（委　員） 大人の目線で本をつくるというお話であるが、今、子どもたちの国語の学習の点で言うと、一つの教材を読む目的として、自分でそのお話をパンフレットなり、本などにするという意欲として、しっかりと本を読んでいこうという点がある。ビジョン 13 ページの人生 100 年時代の箇所に「多様な学習機会を創出するために市民の自主的・自発的な学習活動を支援する機会の提供に努める」と書いている。いろんな世代で、本を借りに図書館に来るということだけでなく、ものをつくるという視点もあれば、図書館として活気が出てくると思う。文言としてビジョンに入るのであれば入ったらよい。

（事務局） ご提案いただいた考え方は大事だと考えており、ビジョンにはそうした意味合いも含めて、「自主的自発的な学習を支援する」という大きな視点で表記している。具体的な中身、やり方については、例えば、今後開館 20 周年の記念イベントなどで、企画として検討してはと考えるがいかがか。

また、市民がつくられた本を一堂に集め、保管し、利用者に見てもらうように整備するといった一連を図書館で行うには対応が難しい面がある。そして、だれの本は置けて、何らかの理由でだれの本は置けないということになれば、つくる人に対して公平性を保てないことも懸念されるため、今後企画する段階で委員の皆様にも相談させていただきながら方法を整理していってはどうか。

ビジョンの表記については、23 ページの⑤に、利用者や住民の自主的・自発的な学習活動を支援する、講座や資料展示会の開催も進めていくと表示している。また、24 ページの中期実践項目の下に、市民の自主的な学習

や創作活動を支援すると表記している。

（委　員） 委員のご提案は、今から講座を開いて本を書くということで、図書館の職員が担うことを前提に考えれば、現状のキャパシティやノウハウが課題として出てくるのではないか。

（委　員） 予算的なこともあるので、今年これをやって、好評だったから次年度は次のステップへというふうに、長いスパンで段階的に考えていってはどうか。そうでなければ司書の数も少ないので、一度にあれもこれもできない。講座をするうちに自費出版する人も出てくれば、国会図書館や地元の図書館にもおけるので、形としてその人の顔として集めることができる。ビジョンにはうたわずに一つずつ段階的に進めていってはどうか。

（委　員） 図書館友の会のメンバーでも和綴じの講座を開いている人もいる。はじめは手帳をつくるとか、次はもう少し大きものをつくるなどされている。最近では友の会の会報を製本して図書館に寄贈している。こうした小さな活動を継続している。ご提案のことが一気にできないにしても、こうした小さな取り組みから手掛けてはどうか。ビジョンに入れてしまうと、一気にできるかというと難しくないか。10 年かけてできればよいが、そこまでのビジョンが持てるかといえばどうかと思う。

（事務局） それでは企画として、今後委員の皆様にも相談させていただきながら検討させていただくこととし、ビジョンの中では、現状の表記のままで修正せずに進めてよいか。

（各委員） 異議なし

（委　員） ビジョンの見直しは必要だと思うが、期間は短期・中期・長期か、それとも 1 年ごとの見直しになるか。

（事務局） ビジョンの見直しは概ね 5 年をめどとし、各事業の見直しは 1 年毎になる。

（委　員） 前回のビジョンの見直し内容は文章化されているか。館長が替わるごとに見直し内容を含めてビジョンを引き継いでいけたら問題ないと思う。見直しをするのであれば、これから 10 年のビジョンについては、例えば、協議会でこういう反省の意見があった、自分たちもこういう状況であった、ついては、これから中期で予定しているものでこの事業は予算がつかなかったからやらないとか、新たにこれを付け加えたとか、そういう文書を引き継ぎの中に入れ、後任が分かるように明文化していくことが大事だと思う。

（委　員） 付け加えて、31 ページ以降の表について、図書館協議会の報告の際は矢印だけでなく、何ができて、何ができなかったのかを詳しく説明願いたい。協議会の回数は 2 回だが、協議会で報告してもらえればそれが文章として残るので検討願いたい。あるいは内部で文章化して、協議会の開催前に配布していただく方法もあると思う。検討願いたい。

（委　　員） ビジョンはあくまでも予定。こうしたいという指針。やれないことは多く出てくると思う。予算も減ってくる、職員も替わる、その中でビジョンに掲げる利用促進は担保できないと思っている。現状維持するだけで精いっぱいだと私は思っている。今後は、やれなかったことをやめてしまうのかどうかを見極めることも大事。中期・長期でやろうとしていたことをやめて、短期でできなかったこれをやりましょうというのもありかもしれない。次期協議会の委員や職員がそのことを共通認識できるように明文化して後任に引き継いでいってほしい。

（委　　員） ビジョンは指針で進む方向性である。できなかったことはあるが今後こうして進めてくださいという 10 年の道しるべ。館長や職員が替わり、進む道が分からなくなってしまっては効率も悪くなる。なぜ、これができなかったのかも含めて明文化しておいてほしい。

（事務局）明文化について承知した。併せて、協議会で報告する方法も分かりやすい説明ができるよう考えていく必要があると思っている。

（委　　員） 明文化して引き継いでいくことを表記してはどうか。

（委　　員） それでは、30 ページの（2）推進方策の文章に、「図書館協議会に諮り、必要な見直しを進めます。必要な見直しについては、明文化し、次に引き継ぎます。」というような表記を入れてはどうか。

（各委員）　異議なし

（会　　長）　今回が最後の協議会となる。ほかに意見等はないか。

（各委員）　なしの声

（会　　長）　すべて出尽くしたようなので、これで協議事項を終了とする。

5. 閉会